



# 奥能登国際芸術祭2023

企画公募現地見学会資料

～概要編～

奥能登国際芸術祭実行委員会



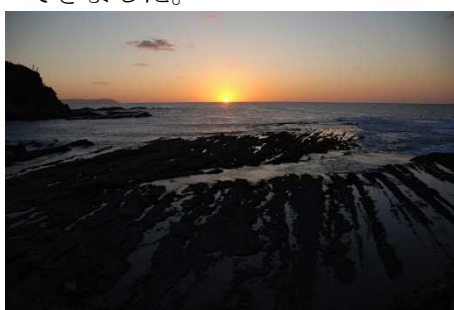
珠洲市について	4
珠洲の里海	5
受継がれる伝統産業	7
里山の生業	8
今はなき能登線と海上航路	8
祭礼と神事	9
文化財など	10

## 珠洲市について

能登半島の最先端に位置し、三方を海に囲まれた珠洲市。荒々しい岩礁海岸の外浦（日本海側）と、波穏やかな砂浜の内浦（富山湾側）という2つの海をもつ、美しい自然景観が広がるまちです。黒瓦と板壁の家が軒を連ね、日本の原風景を感じさせる町並みが今も残っています。

豊かな里山里海の中で育まれた固有の文化も多く、「奥能登珠洲の秋祭りと『ヨバレ』」に象徴される「祭り文化」や農耕儀礼「あえのこと」などの地域文化が生活に根付いています。揚浜式製塩や炭焼き、珠洲焼、珪藻土を使った七輪などの伝統産業も大切に受け継がれており、これらの伝統産業や農耕儀礼を含む、豊かな里山里海は「能登の里山里海」として2011年に世界農業遺産（GIAHS）に認定されました。

また、金沢大学と連携し恵まれた里山里海的环境を活用した都市-農村交流、地域振興のための人材育成事業（能登里山里海マイスター育成プログラム）の推進が、2015年にプラチナ大賞受賞、2018年には「SDGs（持続可能な開発目標）未来都市」に認定されるなど様々な取組が評価されてきました。



△里海の夕陽の風景（外浦）



△里山の棚田の風景



△揚げ浜式製塩の風景

珠洲市では、四季を通じて各集落において五穀豊穰を願い、祝う「村祭り」が行われています。特に秋のシーズンは9月上旬から10月下旬の約50日間、連日市内のどこかの集落で秋祭りが行われています。秋祭りではお神輿の灯り役として「キリコ」を担ぎます。キリコは市内に100基以上もあると言われています。

祭りになると、キリコの担ぎ手に精を出してもらうために自宅で主人が酒と食事をふるまう「ヨバレ」という風習がみられます。珠洲市では「ヨバレ」が現在でもほぼ全ての祭りで行われており、親戚や友人知人を御膳料理でもてなします。珠洲市には、日本のおもてなし文化の原型が残っているのです。

この「奥能登珠洲の秋祭りと『ヨバレ』」は第19回「ふるさとイベント大賞」総務大臣表彰を受賞しました。また、2015年には「灯り舞う半島 能登～熱狂のキリコ祭り～」が日本遺産に認定され、奥能登珠洲の祭り文化に改めてスポットがあたっています。

美しい「里山里海」、豊かな「食」、そして何よりも素晴らしい「人」が暮らしている珠洲市。日本の祭りと食文化の源流が伝わるまちです。



△境内に集まるキリコの様子



△ヨバレの様子



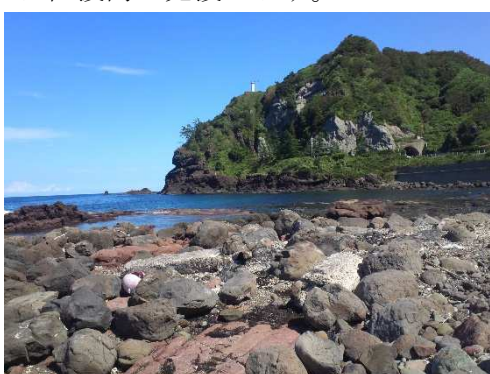
△運行するキリコの様子

## 珠洲の里海

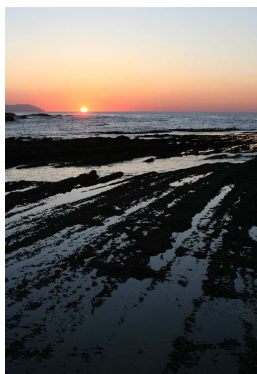
### 「外浦」と「内浦」

珠洲では、岩礁の続く西岸を「外浦」、砂浜の多い東岸を「内浦」と呼びます。この対照的な2つの風景は、しばしば男性と女性に例えられます。成り立ちも真逆で、「外浦」は隆起性（地盤が持ち上がって生まれた）海岸、「内浦」は沈降性（海面が上昇して生まれた）海岸です。外浦は、仁江海岸をはじめ、海蝕による奇岩、マグマが冷えて固まった火山岩などが連なり、祿剛崎のような断崖も多く見られます。冬はシベリアからの冷たい季節風を受け、打ち寄せた荒波が白い泡になり風に舞い上がる「波の花」が海岸を覆います。この季節風を海岸沿いの集落では「間垣」を張り巡らせて防ぎます。

一方、富山湾に面する内浦は砂浜で、ゆるやかな曲線を描きます。波打ち際まで植物が茂り、静かな海とおだやかな景観が続きます。内浦と外浦の境は珠洲岬（金剛崎）。晴れた日は、遠くに佐渡島が見渡せます。



△岩礁が続く外浦側



△仁江海岸（外浦側）



△砂浜が続く内浦側

### 2つの海流が豊かな漁場を育む

海に突き出した鎌のような形の能登半島は、リマン海流（寒流）、対馬海流（暖流）という2つの海流に大きく影響を受けてきました。北の海で冷やされ、ユーラシア大陸に沿って南下してくるリマン海流。赤道付近で緩められ太平洋を流れる黒潮と分離し、日本海を北上してくる対馬海流。この2つの海流が能登半島沖で交わります。能登半島の沖合は、暖流と寒流が交わることから、魚種が豊富です。海流が半島にぶつかり過流が発生し、回遊魚が滞留するので大漁に獲れます。

内浦ではこの回遊魚を狙い、定置網を敷きます。春のサワラ、アジ、冬のブリがその代表です。春を告げるサヨリの船曳き漁。5月～7月のイカ釣り漁。6月になるとトビウオが獲れ、「アゴだし」は、能登の食を支える食材です。北陸で夏の魚といえばナメラバチメ（高級魚のキジハタ）、コゾクラ（ブリの赤ちゃん500g未満）が有名ですが、アマダイやサザエも豊富に獲れます。また、岩ガキの中でも海底で金色に輝く「黄金岩ガキ」は、珠洲沖でしか獲れない貴重な食材です。秋にはカマス、サバが旬を迎え、底曳網漁の解禁でメギス、ハタハタなどの底魚や、甘エビ、ガスエビが獲れます。11月6日にはカニ漁も解禁に。12月～2月半ばにはタラ、アンコウが市場に出回ります。



△水揚げの様子（蛸島港）



△蛸島港セリの様子

## 大陸との交流

朝鮮半島、渤海国—大陸とのつながり海流は人を運ぶ「海の幹線道路」でした。リマン海流に乗り、朝鮮半島の東側から対馬、壱岐を伝って北九州沿岸へ。そこから沖合に出て対馬海流に乗れば、出雲、若狭、北陸へと無理なく着岸できました。

古墳～奈良時代には、朝鮮半島の人々が能登半島に盛んに渡来して、製鉄や造船などの大陸文化を伝えました。713年、大陸の沿岸に日本海を挟んで向き合うように立国した渤海国の人々が、能登半島を訪れました。珠洲の南、外浦に面する福良（志賀町）には、桓武天皇の勅命で「客院」（領事館のような施設）がつけられました。

能登の福良と、渤海のポシエト湾を結ぶ航路は、そこから陸路で渤海の都・上京龍泉府、そして唐の都・長安へつながっていました。渤海国からは34回、日本からは14回、それぞれ使節が派遣されました。多くの商人、修行僧や留学生たちがこの船に乗り、列島と大陸を行き来したことでしょう。

## 珠洲焼の隆盛、北前船の活躍

12世紀の中頃に始まった珠洲焼。京都（若狭湾）と蝦夷地を結ぶ航路が発展し、その流路に乗り、日本の4分の1の地域に販路を広げました。能登最大の荘園だった若山庄の一带に窯が築かれ、還元焰燻べ焼（酸素の供給を控えて焼くと、鉄分が黒く発色し、固く焼き締まる）により、主に甕、壺、播鉢などの日用陶器を焼きました。

江戸時代になると、日本海を舞台に、北前船が活躍します。大坂から綿、木綿、酒などを積み、瀬戸内海沿岸から塩、石材、生蠟などを仕入れて、日本海の港で売りさばきながら北海道まで行きます（下り）。北海道ではニシン、昆布、サケなどの海産物を買ひ、日本海の港で米を積み、それらを瀬戸内海や大阪で売りました（上り）。下りと上りの一航路で、千両ほど（約1億円）の利益があったといひます。珠洲でも、岸田三郎右衛門（正院）、泉屋勘兵衛（飯田）などの海商が活躍しました。



△渤海国との海路



△珠洲焼の壺



△珠洲焼の花器など

## 受継がれる伝統産業

### 能登杜氏

珠洲は杜氏どころとしても知られます。昔から農閑期の出稼ぎとして、農家の男たちは冬場の半年ほどかけて酒づくりに没頭しました。

「能登杜氏」には珠洲の出身者が多く、上戸、宝立、若山がその中心でした。始まりは江戸中期頃。南部・越後・但馬杜氏と並ぶ日本四大杜氏、酒造出稼ぎの集団に数えられます。技術面の評判が高く、越中、加賀、近江、明治維新後は、三重、愛知、静岡まで行き、大正期には遠く北海道や樺太、満州まで進出。1936年の能登杜氏の出稼ぎの人数は、約4,000人という記録が残っています。全国に散らばった能登杜氏は、冬を越えて3月、故郷に土産を持ち帰りました。備中ぐわ、梯子背がち、稲の新品種、サツマイモなどが、他の地域よりも早く伝わったといえます。



△酒の仕込み作業



△酒の仕込み作業



△珠洲市の地酒

### 揚げ浜式製塩

海に囲まれた能登半島では、弥生時代や古墳時代から塩づくりに使われた底の尖った土器も多く出土しています。製塩が大規模化されたのは、加賀藩が専売制をしいた江戸時代でした。

桶に汲み上げた海水を、砂の敷かれた塩田にふり撒き、日照と風で水分を蒸発させる。砂に付着した塩の結晶をろ過して溜めた「かん水」を煮詰め、塩を結晶化させていく揚げ浜式の塩づくりは、貴重な文化であり能登の名物である。かつて塩田は半島をとり囲むほど多く見られ、珠洲の塩づくりは藩内一の生産量を誇った。過酷な労働に当たった塩士たちには米（塩手米）が前貸しされ、生産された塩は全て召し上げられ、苦しい暮らしが強いられたといわれます。

馬縞町（大谷）に伝わる「砂取節」（すなとりぶし）は、10kmほども離れた浜まで、よい砂をとるために漕ぐ舟の上で唄った、浜士たちの労働歌だ。強い季節風や海水が目にしみていただける「目ぐされ」に苦しみながら、唄って励まし合う人びとの息遣いを伝えています。

こうしてでき上がったミネラル豊かな能登の塩は、船に乗って日本中に渡った。しかし18世紀、西廻り航路によって価格の安い瀬戸内海の塩が運ばれて来るようになると、押され気味の能登の塩は販路を陸路へと変え、奥能登から飛騨へと続く「塩の道」を拓いて販路を開拓しました。



△国指定無形民俗文化財  
「能登の揚浜式製塩の技術」



△揚げ浜式塩田作業風景



△県指定無形民俗文化財「砂取節」

## 里山の生業

2011年6月、「能登の里山里海」が国連食糧農業機関（FAO）の世界農業遺産（GIAHS）に認定されました。「里山里海」とは、人間と自然の共生の象徴です。山・里・海が近い能登半島では、山と海の両方からの恵みを受け、生態系や美しい景観を守りながら、独特の伝統文化を育んできました。農業を基軸に、漁業や林業など、他の生業も兼ねる暮らしぶりが特徴です。

複数の生業にかかると自然との接点も多様になります。例えば、能登の製塩には燃料となる薪が欠かせません。薪の切り出しは、山の手入れにつながります。間伐をしなければ、木は太らず、風や雪で倒れます。密集した林には下層植物が育たず、水土保持を妨げ、土砂崩れの原因にもなります。山の仕事には、炭焼きや椎茸栽培、かつては木地づくりや漆掻きなどもあり、かかわる人々の多様性は豊かさの表れでした。

里山は食にも恵まれ、山菜やキノコ、根菜類が豊富に採れます。珠洲は県内一のマツタケの産地で、昔から酒に入れたマツタケ酒やみそ漬けにするなど、さまざまに利用されてきました。収穫しすぎることなく尊んだ先人たちにより、自然の恵みは保たれてきました。



△珠洲の杉林



△間伐作業



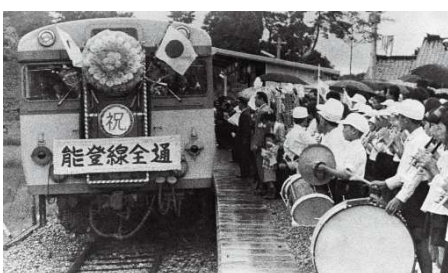
△炭焼き

## 今はなき能登線と海上航路

珠洲に鉄道が初めて走ったのは戦後です。「奥能登にも鉄道を！！」という声は、明治時代から続く多くの人々の悲願でした。そして1954年、能登半島のほぼ中央にある穴水駅から先端に向かって工事が進み、10年後、能登線が全線開通しました（穴水―蛸島）。

しかし乗客の減少から赤字路線となり、1987年、経営が第三セクター「のと鉄道能登線」に移行。その後、2005年に穴水―蛸島間の運転が終わり、41年間走った線路は廃線となりました。現在では、旧沿線上に、駅舎やプラットホーム、線路跡地が一部残っており、当時の面影が垣間見ることができます。

海上交通については、飯田―七尾に定期便が初めて就航したのは1958年。海路で七尾に出て、七尾鉄道、北陸線を乗り継いで金沢へ出るルート利用されました。1975年からは2年間、飯田―佐渡を結ぶカーフェリー「かもめ」が就航（のち七尾―飯田―佐渡をホバークラフト「シグナス」が就航）。また82年から、飯田―糸魚川にカーフェリー「たまひめ」が就航、海が距離を縮めました。



△能登線開通の様子



△第三セクター「のと鉄道」



△カーフェリー「かもめ」



## 祭礼と神事

### キリコ（奉燈）

夏から秋にかけて、能登半島では毎日といってよいほどどこかで祭りが行われます。

中でも勇壮なキリコ（奉燈）は、きらびやかな飾りと屋根がつき、鐘や太鼓を乗せてお囃子をしながら、担ぎ曳かれる。10mほどもある巨大なキリコが複数出る祭りもあります。

珠洲市では、旧暦の七夕祭りや秋祭りにこの「キリコ」が多く出ます。いずれのキリコも夜闇を明るく照らし、にぎやかな囃子と担ぎ手たちに囲まれながら、神輿を導き、神をひととき引き留めようとするかのように、行ったり来たりを繰り返しながら練り歩きます。派手な衣装の若者たちが、夜通し太鼓や鐘を鳴らし、笛の調べや威勢のいい掛け声が集落に響き渡るハレの時。一説によるとそれは七夕伝説のように1年に1度、訪れる神を奉燈で迎える祭りであり、そのための依り代と祝いの神楽が一体となったのがキリコだという。

キリコの出る祭りの日、家々では客人たちを歓待する「ヨバレ」が開かれます。赤い漆塗りの、祭り御膳を前に客人たちと酒を酌み交わした若者たちは、キリコを担ぎに練り出し、夜明けまで祭りの時を過ごします。



△境内に集まるキリコの様子



△ヨバレの様子



△まつり御膳

### あえのこと

座敷に上げて歓待する風習は、田の神をもてなす「あえのこと」にもみられます。田にいて、稲を実らせる田の神様が仕事を終える冬のはじめ、家主が袴姿で田に迎えに行き、自宅へ迎え入れ、御馳走したり風呂に入れたりして初春まで休んでいただくために接待する儀式です。

家によってその時期や作法は異なるが、田の神様は目が悪いとされるため、丁寧に招き入れ、御馳走の品々を説明していく。特別な漆塗りの椀に、小豆飯や手づくり豆腐の汁、根菜類の煮物や赤いハチメ（魚）などを盛り、御膳の手前には、夫婦の子宝を暗示する二股大根を供えます。儀式が終わると田の神様は種もみ俵にこもり、そのまま冬を越すとされ、翌年2月に家主は再び饗応（きょうおう）してから、神様を田へと案内しこの年の実りを祈る。

自然を畏れ、神々への感謝をささげてきた先人たちの奥ゆかしい風習である。



文化財など

指定別	種別	名称	数量	所在地	所有者または管理者	指定年月日
<b>【国指定】</b>						
重要文化財	建造物	黒丸家住宅	4棟	若山町上黒丸	個人	S46.12.28
"	"	白山神社本殿	1棟	宝立町春日野	白山神社	S49.5.21
"	彫刻	木造男神像	5体	三崎町寺家	須須神社	S25.8.29
"	"	木造不動明王坐像	1体	宝立町春日野	法住寺	H28.8.17
重要有形民俗文化財		能登の揚浜製塩用具	166点	上戸町北方	瑞雲泉業(株)	S44.4.12
"		能登の漆掻きおよび加賀能登の漆工用具	1,445点	"	"	S45.7.30
重要無形民俗文化財		奥能登のあえのこと		奥能登一円	奥能登のあえのこと保存会	S51.5.4
"		能登の揚浜式製塩の技術		清水町	能登の揚浜式製塩保存会	H20.3.13
史跡		珠洲陶器窯跡	29,124.89㎡	市内10箇所	珠洲市ほか	H20.7.28
天然記念物		須須神社社叢	高座8,620㎡ 金分9,157㎡	三崎町寺家	須須神社	S50.6.26
<b>【県指定】</b>						
有形文化財	彫刻	木造阿弥陀三尊像	3体	長橋町	曹源寺	S45.11.25
"	"	木造白山神社獅子頭	1頭	宝立町春日野	白山神社	S58.1.25
"	古文書	須須神社文書	73通	三崎町寺家	須須神社	S57.1.12
"	"	常利家文書・馬縹本光寺文書	13通	馬縹町	個人・本光寺	"
"	典籍	紙本墨書大般若波羅蜜多經	494巻	馬縹町	個人	S58.1.25
無形民俗文化財		砂取節		馬縹町	砂取節保存会	S43.2.26
"		蛸島早船狂言 附 早船一隻(附属船具・伝馬船を含む)、木偶9個		蛸島町	蛸島早船狂言保存会 高倉彦神社	H8.9.14
史跡		平時忠卿及び其の一族の墳	50㎡	大谷町則貞	個人	S14.12.27
天然記念物		山伏山社叢	4,033㎡	狼煙町	須須神社奥宮	S40.3.17
"		倒スギ	1株	上戸町寺社	高照寺	S44.3.19
"		平床貝層	165㎡	正院町川尻	個人	H3.12.25
"		平床貝層産出貝類化石	5,397点	蛸島町	珠洲市	H16.11.30
"		宝立山アテ天然林	3,966㎡	若山町南山	南山区	H18.4.7
"		大谷ののきトクシマツツジ	約10,000㎡	若山町洲巻	洲巻区	"
天然記念物及び名勝		見附島	3株	大谷町	個人	"
			1,047㎡	宝立町鵜飼	住吉神社	H29.1.24
<b>【市指定】</b>						
有形文化財	建造物	春日神社本殿	1棟	飯田町	春日神社	S34.3.4
"	"	八幡神社の石塔	1基	宝立町南黒丸	八幡神社	"
"	"	石造五重塔	1基	三崎町寺家	翠雲寺	H5.3.18
"	絵画	絹本着色大谷本願寺親鸞聖人絵伝	4幅	正院町正院	西光寺	S37.2.13
"	"	絹本着色前田利家画像	1幅	野々江町	妙珠寺	S42.5.22
"	"	絹本着色前田利家画像	1幅	宝立町鵜飼	妙厳寺	S43.11.6
"	"	絹本着色大谷本願寺親鸞聖人絵伝	4幅	"	"	"
"	"	絹本着色方便法身尊像	1幅	"	"	S44.2.6
"	"	絹本着色十三仏画像	3幅	三崎町粟津	琴江院	"
"	"	絹本着色両界曼荼羅図	2幅一対	上戸町寺社	高照寺	"
"	"	絹本着色十六羅漢図	1幅	宝立町鵜飼	妙厳寺	S46.12.10
"	"	絹本着色仏涅槃図	1幅	宝立町金峰寺	金峰寺	"
"	"	絹本着色蓮恵・妙忍尼画像	2幅一対	若山町大坊	正福寺	S63.3.18
"	"	絹本着色蓮如上人画像	1幅	飯田町	西勝寺	H5.3.18
"	彫刻	木造薬師如来坐像	1体	高屋町	薬師寺	S34.12.15
"	"	木造弥勒菩薩坐像	1体	三崎町寺家	翠雲寺	"
"	"	木造随神像	2対一対	馬縹町	春日神社	S41.6.1
"	"	木造狛犬	2頭一対	"	"	"
"	"	木造阿弥陀如来坐像	1体	飯田町	大運寺	S49.6.17
"	"	木造阿弥陀如来坐像	1体	三崎町寺家	翠雲寺	"
"	"	木造延命地藏菩薩坐像	1体	"	"	"
"	"	木造随神像	2対一対	長橋町	北嶋荒御前神社	S63.3.18
"	"	木造狛犬	2頭一対	"	"	"
"	"	木造随神像	2対一対	大谷町	大谷神社	"
"	"	木造狛犬	2頭一対	"	"	"
"	"	木造聖観音立像	1体	三崎町粟津	南観音院	"

指定別	種別	名称	数量	所在地	所有者または管理者	指定年月日
【市指定】						
有形文化財	彫刻	木造男神像	1体	若山町経念	古麻志比古神社	S63.3.18
"	"	木造力士像	2対一対	"	"	"
"	"	木造狛犬	2頭一対	上戸町寺社	上戸気多神社	"
"	"	王舞面	1面	宝立町春日野	白山神社	"
"	"	木造男神像	1体	若山町出田	"	H5.3.18
"	"	木造金剛力士像及び胎内文書	阿・吽形2体、 古文書15点	宝立町春日野	法住寺	"
"	工芸品	梵鐘	1口	飯田町	乗光寺	S37.2.13
"	"	梵鐘	1口	正院町小路	千光寺	"
"	"	梵鐘	1口	三崎町粟津	琴江院	"
"	"	金口	1口	長橋町	北嶋荒御前神社	"
"	"	黒漆朱猫瓶子	2口一対	三崎町雲津	個人	"
"	"	正院焼遊鯉文大鉢	1口	上戸町北方	個人	S42.5.22
"	"	正院焼唐草文喰籠	1鉢	三崎町大屋	個人	"
"	"	三杯焼竹根形花生	1口	宝立町春日野	個人	S46.12.10
"	"	正院焼双鯉青海波文大鉢	1鉢	飯田町	個人	S48.6.5
"	"	木造地藏菩薩懸仏	3面	上戸町寺社	上戸気多神社	S63.3.18
"	"	金銅馬頭観音懸仏	1体	若山町上山	上山神社	H5.3.18
"	"	鑄銅大日如来懸仏	1体	若山町上正力	伊勢神社	"
"	書跡・典籍	後柏原天皇宸翰御詠草	1幅	飯田町	春日神社	S34.3.4
"	"	絹本着色十二光仏十字名号	1幅	若山町大坊	正福寺	S63.3.18
"	"	蓮如上人吉崎草案御文	1巻	"	"	"
"	"	紙本墨書正法眼蔵	20冊	正院町小路	千光寺	H5.3.18
"	古文書	法住寺文書	18点	宝立町春日野	法住寺	"
"	考古資料	須恵器子持長頸瓶	1口	蛸島町	珠洲市	S46.12.10
"	"	金銅装双竜環頭大刀柄頭	1箇	宝立町春日野	個人	S51.1.14
"	"	珠洲焼仏像	2体	宝立町鶴島	劔神社	H5.3.18
"	"	珠洲焼神像	2体	宝立町柏原	個人	"
"	"	珠洲焼仏像	1体	"	"	"
"	"	虚空蔵菩薩板碑	1点	大谷町角間	国造神社	"
"	"	珠洲焼	68点	蛸島町	珠洲市	"
"	歴史資料	能登塩田再興碑	1基	上戸町北方	"	H27.11.25
"	"	正院素麺関係文書類	106点	蛸島町	"	"
有形民俗文化財		須受八幡宮神事能遺物	舞台1棟、 面28面、鼓2箇	正院町正院	須受八幡宮	S41.1.7
無形民俗文化財		珠洲ちよんがり		珠洲一円	珠洲ちよんがり保存会	S51.7.19
"		叩き堂祭り		片岩町	片岩白山神社氏子会	H5.3.18
"		ニワマンリ		清水町	清水白山神社	"
"		若子祭り		真浦町	白山神社氏子会	"
"		飯田燈籠山祭り		飯田町	飯田燈籠山保存会	H8.7.8
"		経念の虫送り		若山町経念	古麻志比古神社氏子会	"
"		正院奴振り		正院町正院	正院奴振り保存会	H28.8.24
史跡		永禅寺山古墳群	6基	上戸町寺社	永禅寺	S34.3.4
"		鈴内横穴古墳群	2群	若山町鈴内	個人	"
"		岩坂横穴古墳群	3群	岩坂町	個人	"
"		高波縄文遺跡	約5,000㎡	三崎町高波	個人	S37.2.13
"		館家の五輪塔・板碑群	1群	正院町正院	珠洲市	S63.3.18
"		無縫塔	2基	上戸町寺社	永禅寺	"
"		正院川尻城跡	41,514㎡	正院町川尻	珠洲市ほか	H20.5.26
天然記念物		高倉彦神社社叢	9,778㎡	蛸島町	高倉彦神社	S37.2.13
"		徳保八幡神社社叢	350㎡	高屋町	"	"
"		黒峰の林叢	992㎡	若山町南山	南山区	S41.1.7
"		愛宕神社のスギ	1株	宝立町春日野	愛宕神社氏子会	"
"		新宮神社のスギ	1株	若山町大坊	新宮神社	S48.6.5
"		鉢ヶ崎ハマドクサ群落	約36,000㎡	蛸島町	珠洲市	S48.7.16
"		石田家のタブノキ	1株	大谷町	個人	S52.8.22
"		やぶ椿	1株	三崎町宇治	本龍寺	H11.5.19
"		珪藻土産アロデスムの化石	1個体	蛸島町	珠洲市	"



MEMO

A series of horizontal dashed lines providing a writing area for the memo.

#### 参考文献

珠洲市制五十周年記念「珠洲のれきし」  
奥能登国際芸術祭 2017 ガイドブック  
奥能登国際芸術祭 2017 記録集  
奥能登国際芸術祭 2020 + 記録集  
スス・シアター・ミュージアム カタログ

#### 編集

奥能登国際芸術祭実行委員会  
〒927-1214 石川県珠洲市飯田町13-120-1  
TEL 0768-82-7720 FAX 0768-82-7727  
E-mail info@oku-noto.jp  
公式Webサイト <https://oku-noto.jp/>